



アル
中
編

母
葉
田
デ



吾輩蠅之
中編
夏目漱石著





天許複製

明治三十九年十一月一日印刷
明治三十九年十一月四日發行

著者 發行所 印刷所 發行所 全發行所

東京市日本橋區
通一丁目十九番地
東京市日本橋區
通二丁目九番地
東京市日本橋區
西側町廿六十七番地
東京市日本橋區
通一丁目日本橋目區
東京市日本橋區
通二丁目日本橋目區

定價金九十錢

夏目金之助
大倉保五郎
服部國太郎
石川金太郎
株式會社 秀英舍
大倉書店
服部書店



夏目漱石

《第六》

かう暑くては猫と雖遣り切れない。皮を脱いで、肉を脱いで骨丈で涼みたいものだ。と英吉利のシドニー、スミスとか云ふ人が苦しがつたと云ふ話があるが、たとひ骨丈にならなくとも好いから、責めて此淡灰色の班入の毛衣けころもは一寸洗ひ張りでもするか、もしくは當分の中質にでも入れたい様な氣がする。人間から見たら猫杯は年が年中同じ顔をして、春夏秋冬一枚看板で押し通す、至つて單純な無事な錢のかゝらない生涯を送つて居る様に思はれるかも知れないが、いくら猫だつて相應に暑さ寒さの感じはある。たまには行水の一度位あびたくない事もないが、何しろ此毛衣の上から湯を使つ

た日には乾かすのが容易な事でないから汗臭いのを我慢して此年になる迄洗湯の暖簾を潜つた事はない。折々は團扇でも使つて見様と云ふ氣も起らなくては無いが、兎に角握る事が出来ないのだから仕方がない。夫を思ふと人間は贅澤なものだ。なまで食つて然る可きものを態々煮て見たり、焼いて見たり、酢に漬けて見たり、味噌をつけて見たり好んで餘計な手数を懸けて御互に恐悦して居る。着物だつてさうだ。猫の様に一年中同じ物を着通せと云ふのは、不完全に生れ付いた彼等にとつて、ちと無理かも知れんが、なにもあんなに雑多なものを皮膚の上へ載せて暮さなくてももの事だ。羊の御厄介になつたり、蠶の御世話になつたり、綿帛の御情けさへ受けるに至つては贅澤は無能の結果だと斷言しても好い位だ。衣食は先づ大目に見て勘辨するとした所で、生存上直接の利害もない所迄此調子で押して行くのは毫も合點が行かぬ。第一頭の毛など、云ふものは自然に生えるものだから、放つて置く方が尤も簡便で當人の爲になるだらうと思ふのに、彼等は入らぬ算段をして種々雑多な恰好をこしらへて得意である。坊主とか自稱するものは

いつ見ても頭を青くして居る。暑いと其上へ日傘をかぶる。寒いと頭巾で包む。是では何の爲めに青い物を出して居るのか主意が立たんてはないか。さうかと思ふと櫛とか稱する無意味な鋸様の道具を用ゐて頭の毛を左右に等分して嬉しがつてるのもある。等分にしないと七分三分の割合で頭蓋骨の上へ人爲的の區劃を立てる。中には此仕切りがつゝ、じを通り過して後ろ迄食み出して居るのがある。丸で贗造の芭蕉葉の様だ。其次には腦天を平らに刈つて左右は眞直に切り落す。丸い頭へ四角な枠をはめて居るから、植木屋を入れた杉垣根の寫生としか受け取れない。此外五分刈、三分刈、一分刈さへあると云ふ話だから、仕舞には頭の裏迄刈り込んでマイナス一分刈、マイナス三分刈などゝ云ふ新奇な奴が流行するかも知れない。兎に角そんなに憂身を簍してどうする積りか分らん。第一、足が四本あるのに二本しか使はないと云ふのから贅澤だ。四本であるけば夫丈はかも行く譯だのに、いつても二本で濟して、残る二本は到來の棒鱈の様に手持無沙汰にぶら下げて居るのは馬鹿々々しい。是で見ると人間は餘程猫より閑ひまなもので退屈のあま

り斯様ないたづらを考案して楽しんで居るものと察せられる。但可笑しいのは此閑人（さみじん）がよると障はると多忙だ多忙だと觸れ廻はるのみならず、其顔色が如何にも多忙らしい、わるくすると多忙に食ひ殺されはしまいかと思はれる程（い）、せついて居る。彼等のあるものは吾輩を見て時々あんなになつたら氣樂でよからう杯と云ふが、氣樂でよければなるが好い。そんなにこせこせして呉れと誰も頼んだ譯でもなからう。自分で勝手な用事を手に負へぬ程製造して苦しい苦しいと云ふのは自分で火をかん／＼起して暑い／＼と云ふ様なものだ。猫だつて頭の刈り方を二十通りも考へ出す日には、かう氣樂にしては居られんさ。氣樂になりたければ吾輩の様に夏でも毛衣を着て通される丈の修業をするがよろしい。——とは云ふものゝ少々熱い。毛衣では全く熱つ過ぎる。

是では一手專賣の晝寢も出来ない。何かないかな、永らく人間社會の觀察を怠つたから、今日は久し振りで彼等が酔興に醒甦する様子を拜見しやうかと考へて見たが、生憎主人は此點に關して頗る猫に近い性分である。晝寢

は吾輩に劣らぬ位やるし、殊に暑中休暇後になつてからは何一つ人間らしい仕事をせないので、いくら觀察をしても一向觀察する張合がない。こんな時に迷亭でも來ると胃弱性の皮膚も幾分か反應を呈して、暫らくでも猫に遠ざかるだらうに、先生もう來ても好い時だと思つて居ると、誰とも知らず風呂場でざあ／＼水を浴びるものがある。水を浴びる音ばかりではない、折々大きな聲で相の手を入れて居る、「いや結構」どうも良い心持ちだ、「もう一杯」などゝ家中に響き渡る様な聲を出す。主人のうちへ來てこんな大きな聲と、こんな無作法な眞似をやるものは外にはない。迷亭に極つて居る。

愈來たな、是で今日半日は潰せると思つて居ると、先生汗を拭いて肩を入れて例の如く座敷迄づか／＼上つて來て、奥さん、苦沙彌君はどうしましたと呼ばはりながら帽子を疊の上へ抛り出す。細君は隣座敷で針箱の側へ突つ伏して好い心持ちに寐て居る最中にワンワンと何だか鼓膜へ答へる程の響がしたのではつと驚ろいて、醒めぬ眼をわざと睜つて座敷へ出て來ると迷亭が薩摩上布を着て勝手な所へ陣取つて頻りに扇使ひをして居る。

「おや入らしやいまし」と云つたが少々狼狽の氣味で、ちつとも存じませんでした」と鼻の頭へ汗をかいだ儘御辭儀をする。いゝ、今來た許りなんですよ。今風呂場で御三に水を掛けて貰つてね。漸く生き歸つた所で——どうも暑いぢやありませんか「此兩三日は、ただ凝じとして居りまして汗が出る位で、大變御暑う御座います。——でも御變りも御座いまして」と細君は依然として鼻の汗をとらない。え、難有う。なに暑い位でそんなに變りやしませんや。然し此暑さは別物ですよ、どうも體からだがだるくつてね「私し杯も、ついに晝寢杯を致した事がないんで御座いますか、かう暑いとい——」「やりますかね、好いですよ。晝寢られて、夜寢られりや、こんな結構な事はないでさあ」と不相變呑氣な事を並べて見たが夫丈では不足と見えて「私なんぞ、寢たくない、質でね。苦沙彌君杯の様に來るたんびに寢て居る人を見ると羨しいですよ。尤も胃弱に此暑さは答へるからね。丈夫な人でも今日なんか首を肩の上に載せてるのが退儀でさあ。さればと云つて載つてゐる以上はもぎとる譯にも行かずね」と迷亭君いつになく首の處置に窮して居る。奥さんなんぞ首の上へ

まだ載つけて置くものがあるんだから、坐つちや居られない筈だ、鬻の重み丈でも横になり度なりますよ」と云ふと細君は今迄寢て居たのが鬻の恰好から露見したと思つて「ホ、口の悪い」と云ひながら頭をいぢつて見る。

迷亭はそんな事には頓着なく「奥さん、昨日はね、屋根の上で玉子のフライをして見ましたよ」と妙な事を云ふ。「フライをどうなさつたんで御座います」屋根の瓦が餘り見事に焼けて居ましたから、只置くのも勿體ないと思つてね、バタを溶かして玉子を落したんでさあ」「あらまあ」「所が矢つ張り天日てんぴは思ふ様に行きませんや。中々半熟にならないから、下へおりて新聞を読んで居ると客が來たもんだから遂い忘れて仕舞つて、今朝になつて急に思ひ出して、もう大丈夫だらうと上つて見たらね、どうなつて居りました」「半熟どころか、すつかり流れて仕舞ひました」「あや／＼」と細君は八の字を寄せながら感嘆した。

「然し土用中あんなに涼しくつて、今頃から暑くなるのは不思議ですわね」「ほんとで御座いますよ、先達中は單衣では寒い位で御座いましたのに、一昨日

から急に暑くなりましたしてね「蟹なら横に這ふ所だが今年の氣候はあとびさりをするんですよ。倒行して逆施す又可ならずやと云ふ様な事を言つてゐるかも知れない」なんて御座んす、それは「いえ、何でもないのです。どうも此氣候の逆戻りをする所は丸てハーキュリスの牛ですよ」と圖に乗つて愈變ちきりんな事を言ふと、果せるかな細君は分らない。然し最前の倒行して逆施すで少々懲りて居るから、今度は只「へえ」と云つたのみで問ひ返さなかつた。之を問ひ返されないと迷亭は折角持ち出した甲斐がない。奥さん、ハーキュリスの牛を御存じですか「そんな牛は存じません」は「御存じないですか一寸講釋をしませうか」と云ふと細君も夫には及びませんとも言ひ兼ねたものだから「え」と云つた。昔しハーキュリスが牛を引つ張つて來たんですよ。そのハーキュリスと云ふのは牛飼でも御座んすか「牛飼ぢやありませんよ。牛飼やいろはの亭主ぢやありません。其節は希臘にまだ牛肉屋が一軒もない時分の事ですからね」あら希臘の御話しなの？そんなら、さう仰つしやればいいのにと細君は希臘と云ふ國名丈は心得て居る。だつてハーキュリスぢやあり

ませんか「ハーキュリスなら希臘なんですか」「え、ハーキュリスは希臘の英雄でさあ」「どうりで、知らないと思ひました。それで其男がどうしたんで——」「其男がね奥さん見た様に眠くなつてぐう／＼寝て居る——」「あらいやだ」「寝て居る間に、ブルカンの子が來ましてね」「ブルカンて何です」「ブルカンは鍛冶屋です。此鍛冶屋のせがれが其牛を盗んだんでさあ。所がね、牛の尻尾を持つてぐい／＼引いて行つたもんだからハーキュリスが眼を覺まして牛やゝい／＼と尋ねてあるいても分らないんです。分らない筈でさあ。牛の足跡をつけたつて前の方へあるかして連れて行つたんぢやありませんもの。後ろへ／＼と引きずつて行つたんですからね。鍛冶屋のせがれにしては大出來てすよ」と迷亭先生は既に天氣の話は忘れて入る。

「時に御主人はどうしました。相變らず午睡ですかね。午睡も支那人の詩に出てくると風流だが、苦沙彌君の様に日課としてやるのは少々俗氣がありますね。何の事もない毎日少し宛死んで見る様なものですぜ、奥さん御手數だが一寸起して入らつしやい」と催促すると細君は同感と見へて「え、ほん

とにあれば困ります。第一あなたからだが悪くなる許りですから。今御飯を頂いた許りだのにと立ちかけると迷亭先生は「奥さん、御飯と云やあ、僕はまだ御飯を頂かないんですがね」と平氣な顔をして聞きもせぬ事を吹聴する。「おやまあ、時分どきだのにも氣が付きませんで——夫ぢや何も御座いせんが御茶漬でも」「いえ御茶漬なんか頂戴しなくつても好いですよ」「夫でも、あなた、どうせ御口に合ふ様なものは御座いせんが」と細君少々厭味を並べる。迷亭は悟つたもので「いえ御茶漬でも御湯漬でも御免蒙るんです。今途中で御馳走を逃らへて來ましたから、そいつを一つこゝて頂きますよ」と到底素人には出來さうもない事を述べる。細君はたつた一言「まあ！」と云つたが其まゝの中には驚ろいたまゝあと、氣を悪くしたまゝあと、手数が省けて有難いと云ふまゝあが合併して居る。

所へ主人が、いつになく餘り八釜敷ので、寝つき掛つた眠をさかに扱つかかれた様な心持で、ふら／＼と書齋から出て來る、相變らず八釜敷い男だ。折角好い心持に寢様とした所をと欠伸交りに佛頂面をする。いや御目覺かね、鳳眠

を驚かし奉つて甚だ相濟まん。然したまには好からう。さあ坐り玉へ」とどつちが客だか分らぬ挨拶をする。主人は無言の儘座に着いて寄木細工の巻煙草入から「朝日」を一本出してすば／＼吸ひ始めたが、不圖向の隅に轉がつて居る迷亭の帽子に眼をつけて「君帽子を買つたね」と云つた。迷亭はすぐさま「どうだい」と自慢らしく主人と細君の前に差し出す。まあ奇麗だ事。大變目が細かくつて柔らかいんですね」と細君は頻に撫で廻はす。奥さん此帽子は重寶ですよ、どうでも言ふ事を聞きますからね」と拳骨をかためてバナマの横腹をぽかりと張り付けると成程意の如く拳程な穴があいた。細君が「へえ」と驚く間もなく、此度は拳骨を裏側へ入れてうんと突くと釜の頭がぽかりと尖んがる。次には帽子を取つて鏢と鏢とを兩側から押し潰して見せる。潰れた帽子は麵棒で延した蕎麥の様に平たくなる。夫を片端から箆でも巻く如くぐる／＼と疊む。どうです此通り」と丸めた帽子を懷中へ入れて見せる。「不思議です事ねえ」と細君は歸天齋正一の手品でも見物して居る様に感嘆すると、迷亭も其氣になつたものと見えて、右から懷中に收めた帽子をわざ

と左の袖口から引つ張り出して、どこにも傷はありません」と元の如くに直して、人さし指の先へ釜の底を戴せてくるくゝと廻す。もう休めるかと思つたら最後にぽんと後ろへ放げて其上へ堂つさりと尻餅を突いた。君大丈夫かい」と主人さへ懸念らしい顔をする。細君は無論の事心配さうに、折角見事な帽子を若し壊はしてもしちやあ大變ですから、もう好い加減になすつたら宜う御座んせう」と注意をする。得意なのは持主丈で、所が壊はれないから妙でせう」と、くちやくゝになつたのを尻の下から取り出して其儘頭へ載せると、不思議な事には、頭の恰好に忽ち回復する。實に丈夫な帽子です事ねえ、どうしたんでせう」と細君が愈感心すると、なにどうもしたんぢやありません、元から斯う云ふ帽子なんです」と迷亭は帽子を被つた儘細君に返事をして居る。

「あなたも、あんな帽子を御買になつたら、いゝでせう」と暫くして細君は主人に勧めかけた。だつて苦沙彌君は立派な麥藁の奴を持つてゐるじやありませんか」所があなた、先達て小供があれを踏み潰して仕舞ひまして「おやくゝ

そりや惜い事をしましたね」だから今度はあなたの様な丈夫で綺麗なのを
買ったら善からうと思ひますんで」と細君はバナマの價段を知らないもの
だから「是になさいよ、ねえ、あなた」と頻りに主人に勸告して居る。

迷亭君は今度は右の袂の中から赤いケース入りの鍔を取り出して細君
に見せる。「奥さん、帽子はその位にして此鍔を御覧なさい。是が又頗る重寶な
奴で、是で十四通りに使へるんです。此鍔が出ないと主人は細君の爲めにバ
ナマ責めになる所であつたが、幸に細君が女として持つて生れた好奇心の
爲めに、此厄運を免かれたのは迷亭の機轉と云はんより寧ろ僥倖の仕合せ
だと吾輩は看破した。其鍔がどうして十四通りに使へます」と聞くや否や迷
亭君は大得意な調子で「今一々説明しますから聞いて入らつしやい。いゝで
すか。こゝに三日月形の缺け目がありませう、こゝへ葉卷を入れてぶつりと
口を切るんです。夫から此根にちよと細工がありませう、これで針金をぼつ
くくやりますね。次には平たくして紙の上へ横に置くと定規の用をする。又
刃の裏には度盛がしてあるから物指の代用も出来る。こちらの表にはヤス

リが付いて居る。是で爪を磨りまさらあ。ようがすか。此先きを螺旋鋸の頭へ刺し込んでぎり／＼廻すと金槌にも使へる。うんと突き込んでこぢ開けると大抵の釘付の箱なんざあ苦もなく蓋がとれる。まつた、こちらの刃の先は錐に出来て居る。ここん所は書き損ひの字を削る場所。で、ばら／＼に離すと、ナイフとなる。一番仕舞に——さあ奥さん、此一番仕舞が大變面白いんです、こゝに蠅の眼玉位な大きさの球がありませう、ちよつと覗いて御覽なさい、「いやですは又屹度馬鹿になさるんだから」さう信用がなくつちや困つたね、だが欺されたと思つて、ちよいと覗いて御覽なさいな。え？厭ですか、一寸でいゝからと鋏を細君に渡す。細君は覺束なげに鋏を取りあげて、例の蠅の眼玉の所へ自分の眼玉を付けて頻りに覗をつけて居る。どうです「何だか眞黒ですは眞黒ぢやいけませんね。も少し障子の方へ向いて、さう鋏を寝かさずに——さう／＼夫なら見えるでせう」おやまあ寫眞ですな。え。どうしてこんな小さな寫眞を張り付けたんでせう「そこが面白い所でさあ」と細君と迷亭はしきりに問答をして居る。最前から黙つて居た主人は此時急に寫眞が見たくな